

家族の物語：アシュラと禰豆子を事例に

ながれ

木俣 美樹男 (きまた みきお / 東京学芸大学名誉教授)

一本鎖 RNA ウイルス COVID-19 への恐怖は人間所業の醜悪をさらけ出したが、一方で恐怖に抗い美しい心性を輝かせてもいる。たとえば、現場の医療従事者や廃棄物処理従事者は恐怖と闘いながら、誇り高く社会的責任を遂行しており、熱い感謝を示す人々はとても多い。しかし、経済格差や属性差別も一層露わになり、救援を受けながらも過剰に心無い対応をする人々も少しはいた。

さて、感染防止のために会社も学校も自宅待機になり、家族として寄り添った時間ができた。一時の社会的空白が不幸中の幸いとして、東京時代^注に次第に薄弱となっていた家族の情愛を深めることができたことだろう。

ジョージ秋山 (1970 ~ 1971) 『アシュラ』(少年マガジン掲載)の主人公アシュラおよび吾峠呼世晴 (2016 ~ 2020) 『鬼滅の刃』(少年ジャンプ掲載)の副主人公禰豆子を事例に、心の構造について考えてみたい。この二人は鬼人として描かれ、両作品共に惨たらしい場面が頻繁に出てくる。前著は大学生の頃に読み、当時、保護者の不評を買い、神奈川県などでは有害図書指定や販売禁止になった。後著は孫子の推薦で借りて読み、現在、少女や若い母親層にも人気でアニメーションや小説も含めてベストセラー第一位である。

COVID-19 の恐怖の中で、この二つの漫画作品を家族の物語として読んでみた。この両者の作品への世間の対応に大きな違いがあるのはいくつかの要因があるのだろう。それでも、より惨い場面がある後者の方が、子どもはともかくとしても、子育て世代の女性から非難も受けずにむしろ大好評であるのは、前者の出版年代よりも現実社会に鬼が多くいる

ようになったからか、あるいは人の生死もゲーム感覚になったからなのだろうか。

室町時代末期の戦乱と飢饉の最中にある村で、捨て子アシュラは放浪を生きぬいた。アシュラの実父は散所太夫^{さんじょたゆう}で、身ごもった妻藤乃^{ほうてき}を放擲した。彼女は鬼狂女になり、アシュラを生んだが、飢えのあまり赤子のアシュラさえ喰おうとした。アシュラは自分を導く乞食法師が差し出した彼の腕を食べることができなかった。後に、散所太夫はアシュラが自分の息子であることを知り、罪深い所業を悔いた。狂母は息子アシュラを探し求め、病に余命も無く、やっと再会したアシュラは母を容易に許せなかった。しかし、アシュラは最期の母に百合の花を手向け、「生まれてこなければよかったぎゃ」と慟哭した。ここでアシュラは母と自分の人生を受忍したのだろうか。その後、アシュラが阿修羅として生きたのか人間になって死んだのか、描かれることはなく終わっている。

他方、東京時代中期、大正ロマン・デモクラシーを背景に、禰豆子は鬼人として兄竈門炭治郎^{かまどたんじろう}(鬼殺隊員、主人公)の背負う箱の中で眠り、時として田舎や都会の世間に出て、兄を助け鬼との闘いに生きた。禰豆子は炭焼きを職業とする竈門家の長女である。父が他界していたので、母、炭治郎ほか4人の弟妹たちと暮らしていた。炭治郎が町に炭を売りに行き、一夜、家を留守にしたときに、一家は鬼の長、鬼舞辻無惨^{きぶつじむざん}に襲われ、家族5人は殺されてしまい、唯一人禰豆子は鬼となって生きていた。炭治郎は妹を人間に戻そうと、剣の修行に励み、鬼殺隊員として血鬼術を縦横に操る鬼たち

と戦った。禰豆子は鬼になったにもかかわらず、兄の愛情を認識していたので、人喰いを自制でき、鬼には成りきらず、兄が約束した通りついには人間に戻った。ここに出てくる鬼たちは飢餓によってだけでなく、強くなり人間や鬼を支配する権力を得るために人間を楽しみで沢山喰うのである。彼らは想い違えた家族への心に飢えており、それを権力で置き換えていたのである。

鬼より恐ろしいのは人間の心の闇に深く潜み澱む毒である。毒を溜め込んだ人間は残念なことに実在している。鬼は見た目が怖く、毒人間は見た目ではわからない。ムラ社会の形成とムラ撥撫の発生は学校や会社などでのいじめの構造と同じで、田舎であれ、都会であれ、閉鎖的な時空間で毒を充満させ、人びとの心を分断し、貶め、心的障害ストレス障害に長らく苦しませる。知性ある周りの人々さえも毒に晒されると、傍観者、同調者になってしまう。次は自分がいじめの対象者になることを恐れ、操られるからである。現実から抽出したこんなに面白い人生ゲームが『アシュラ』や『鬼滅の刃』の主題に他ならない。

ほとんどの人間にはとても信じられないことであるが、心に毒を持つばかりでなく、さらに良心を持たない人たちもいる。心理セラピスト、M.スタウト（2005）によればアメリカでは4%が良心を未だに有していないという。良心は第七の感覚で、人間にとってはまだ進化の過程にある感覚である。人類史で時々起こる感染症のパンデミック、現在はCOVID-19によるものであるが、この毒素は人間の心にも及び、隠れていた実に醜い心性を増幅し、露出させているのだ。

現実を見つめ、禍福転じて反省し、心の構造を整理して真の文明への移行準備をしたい。五感を大切に保ち、第六感（直感・直観）を澄まして、第七感（良心）を鍛える。この苦境を乗り越えるには先人から学び、心の構

造（知脳）を鍛錬して、自律することだ。疑心暗鬼に罹るのではなく、人を傷つけず、自らも傷つかない。家族との信頼を育み、師友を求め、学びを深めて人生への信念を鍛え、自然への信仰を証しする。私たち家族は幸せになって良いのであって、地域共同社会で共生するよう原則的に食物や学びを自給知足するための方策を、真の文明にむけてゆっくりと堅実に準備する。

重層して蓄積してきた文化複合（生活、生業、産業、科学、芸術、さらに宗教）は現代の文明を支え、真の文明への移行を保障する。すべてを包み込むような統合する心の構造（環境観）に目覚めたい。家族を支えているのは職業による収入だけではなく、収入にならない生業も必須の支えである。自分たちでできる仕事はささやかでも行ない、不足することを地域共同社会に委託する。さらに、人間の心は家族や地域を越えて、世界の良き事象にも共感することができ、歴史的時空間や地理的時空間を越えてでも協働することができる。

末尾に竜頭ながら、パンデミックは感染症の世界的な大流行を意味しているのだが、人口爆発も自然に対するパンデミックと同じような現象だ。さらに、農業文明以後、人間の食料となる穀物など栽培植物や牛・豚や鶏など家畜の画一種・品種の個体数の激増も同様で、これらには病虫害や病原体が伴いパンデミックを引き起こす。大都市集住、農耕地でのモノカルチャーや畜舎での多頭飼育などとして大集団を形成することが根本的な誘因だ。

参考：エッセイ「超克への祈りと願い」「超克2 嫉妬と保身の自律制御および農耕の勧め」

www.milletimplic.net/essey/conquest.pdf

www.milletimplic.net/essey/conquest2.pdf

（事務局注）東京時代：日本の歴史における時代区分で、東京が首都となってからの日本を指す呼称として考え出された概念の一つ。